

Hakuai Story

博愛物語

かたち
夢が結実に (V)



夢や一途な^{いちず おも}希いを、多くの人々に語ったところで、茫漠とした夢の本質には、何の変化もなく、^ま況してや、それが叶う保証など^{どこ}何処にもない。

だが、この物語の中に、寛仁なO氏の登場があつてからは、夢に明らかな^{かく}輪郭と色彩がつき始めるのだった。この夢は、大きな質感を以って、現実味を帯びた^{もの}夢へと変貌を遂げつつあつた。夢の確かな息づかいを感受し始めていた。

叶う夢への更なる絵付けには、あの日O氏と約した、この夢に援助を呉れる金融機関と巡り会うことが肝要だった。



何としても、独力で、金融機関から開設資金の融資の同意を取り付けねばならなかった。^{おも}希いの病院は、20床規模の病床で、初期の投資総額として2億円ほどを想定していた。土地代や建築費などを^{あら}粗々積み上げた桁外れの金額ではあつたが違和感もなく、何ら^お怖じることもしなかった。

多分、入職を果たした以降、後半の4年間は、会長の私設秘書を命じられ、^{とうじ}往時、医師会の要職にあったM会長の周りで飛び交う億単位の事柄の数々を、側近の立場で聴き慣れていた故^{から}かも知れない。また、役職柄、多くの各界の実力者の方々と知り会う機縁も戴いていた。その中のお一人でもあったO氏の保証が融資を結実するための頼みの綱^{つな}だった。開設資金の融資を決定づけるためには、夢の実相や計画の全容を金融機関へ説得力を以って伝えなければならなかった。更に、この夢に事業性が具備され、健全性と永続性が確保されている旨を資料として証明する必要があった。

こんな病院を創りたい。融資先の金融機関に提出する^{おも}希いの詰まった設立趣意書と事業計画書の作成が始まった。才筆が不足している上に、つい文章も力みがちで、幾重にも修正の重なり合った書類^{もの}となってしまった。公認会計士の方々とも相談を繰り返し、綿密な収支計画や資金繰りも添付した。

自己資本が稀少な分だけ、^{おも}希いの丈を詰め込んだ^{こん}渾身の「事業計画書」が仕上がった。

だが、実際に、融資を依頼する場面では、^{しんぼう}深謀遠慮を巡らしての事業性の^{せつめい}強調などとは縁遠く、大いなる主情的な説得ばかりが目立ったものだった。自己資金や担保と称される^{しろ}代物の何ひとつ無い状況は、到底、融資の実行など幻影のようなものだったに違いない。いま思い返しても偏狂的な^{おもい}熱願だけが突出した常軌を逸した融資の申し込みであったとしか言いようがない。

資金づくりは、想像を超えて困難を極めた。銀行の応接室での名刺交換や会話の総てが^{うい}初々しい^{もの}体験だった。

「本店とも協議の上、後日、お返事を差し上げます」。

窓口相談での決まり文句の返答だった。

医者でもない若僧が、これからの医療は、医療現場と経営とを分離（医経分離）すべきなどと尤もらしい御託を並べ、

青臭い病院像を滔々と述べ立てた果てには、「自己資産や担保は、全くありません」と開き直るのだから始末に負えない。充分過ぎるほど待たされて、挙句の果ての丁重なお断りだった。正に、眼高手低の現実だった。若い情熱^{おもい}だけでは、どうにもならない眼前に立ちはだかる峻嶮な現実。もう少しで手が届きそうな待望の夢の感覚が、錯覚とさえ感じ始めてゆく現実だった。

だが、叶う夢なら何としても越えなければならない正念場でもあった。こんな理想^{おもい}の病院が出来ないのなら日本の医療は潰れるしかない。慨然^{がい}として、救いようもなく独善的な希^{おも}いと青臭さに磨きのかかった唯我独尊は、
無聊^{ぶりょう}を慰めながら悶々^{もん}とした日々が
虚しく暦を駆け抜けてゆくのだった。



季節は、あのO氏の感悦の言葉が煌^{きらめ}いた若葉の頃から枯葉舞う秋を過ぎ、初冬の空にオリオン座が輝く時節^{ころ}へと移る

のだった。依然、夢が叶う可能性は、曖昧^{あいまい}模糊として、一向に眺望が開けない、希^{おも}いだけが跳^{りょう}梁する日々が続いていた。

だが、不思議なことに、この窮地^{とき}も、夢が叶わないと惟^{おも}ったことは、一度もなかった。況^ましてや、諦めようなどと惟^{おも}ったことは無かった。この夢だけは、儚^{はかな}く消えた思春期の夢^{もの}とは何かが違って、決して色褪^あせることがなかった。

患者やその家族にとって、心優しい病院を、弟と一緒に創る。

この信念にも似た希^{おも}いは、決して

衰えを知らなかった。

この頃は、夜空に輝く散光星雲^{オリオン}の伝承に
想いを馳せながら、夢の獵人にでもなった



つもり^{つもり}心算で、蒼白いリゲルや赤みを帯びたペテルギウスを眺めては、溜め息と強がり^{強がり}を吐いていた。

こんな夢裡^みの者に、融資の承諾をくれる銀行との出会いは、
本当にあるのだろうか。

果たして、愁眉を開く時を迎えることが出来るのだろうか。

そんな荏苒^{じんぜん}として日々^{とき}を送る不安な^{こころ}想念を

揺さぶるように、除夜の鐘が余韻^{じょう} 嫋 嫋と

鳴り響く 81 年の大晦日だった。



著者 那須 良昭

発行所 医療法人財団 博愛会

〒810-0034

福岡市中央区笹丘 1-28-25

tel:092-741-2626 fax:092-741-2627

本書に記載されております文書につきましては、転載・無断使用を禁じます

